

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## Picture postcard as research material

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, しおり メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00002029">https://doi.org/10.57529/00002029</a>

# 資料としての絵葉書

## —大場磐雄資料を中心に—

齋藤 しおり

### 要旨

國學院大學にはいくつもの絵葉書資料群が存在する。今回は絵葉書史を整理しながら、國學院大學所蔵の絵葉書資料群の中から、大場磐雄資料についてその内容とコレクションとしての性格を検討した。その結果、坪井正五郎のように人類学的資料の写真資料として絵葉書が簡便で有効であることを指摘したり、大野雲外のように日本石器時代の土器の紋様を抜出して発行した『石器時代紋様絵端書』が、石器時代の研究者などにとって価値があるものとされるなど絵葉書はそのリアルさ簡便さから、研究資料として用いられていたことが分かった。大場磐雄資料の中にも、カード化され写真資料として個別に整理されている絵葉書が多数あることから、大場にとっても絵葉書は貴重な資料であったことがいえるだろう。また、整理箱に整理されている絵葉書資料群は、カード化された写真資料としての絵葉書資料の残りが地域別に整理されたものであった可能性が考えられ、調査資料としての性質を有していると考えられる。

### キーワード

絵葉書、学術資産、写真資料、大場磐雄資料、研究資料

### はじめに

一般に葉書といえは、切手が貼られた状態で郵便局などで売られる国が出している官製葉書と、国以外が製作し発行する、東京タワーや浅草寺、日光東照宮など名所観光地などで売られている切手が貼られていない絵葉書である私製葉書の二種類がある。

國學院大學にはいくつもの絵葉書資料群が存在する。神社に関する絵葉書資料群は、河野省三旧蔵の神社絵葉書資料、学術資料館所蔵の神社関係絵葉書資料、同所蔵宮地直一博士神社関係絵葉書資料などがある。他には歌舞伎役者・新劇役者に関する折口博士記念古代研究所所蔵の歌舞伎絵葉書コレクション、そして大場磐雄博士コレクションの絵葉書資料がある。今回はこうした國學院大學所蔵の絵葉書資料群の中から、大場磐雄資料についてその内容とコレクションとしての性格を検討したい。

### 一、絵葉書概略史

#### 1. 起源

絵葉書の起源は諸説あるが、通説とされるのは、一八七〇年頃の普仏戦争時代に遡る。ドイツのオルデンブルグのプロシヤ宮廷御用書肆兼印刷業者であるシュワルツが普仏戦争に際し、旅館に逗留中の両親を慰めるべく簡単な絵画を印刷して私製葉書を製作して送ったのがその濫觴とされる。シュワルツは砲隊図を葉書に印刷し、短句を添えて送った。この種の絵葉書をシュワルツは戦地の朋友にも送った。そして、一八七五年には『フォルクスポテン』という書の挿画木版を使って絵葉書を印刷発行し、さらにドレスデンのペーブランド美術出版所において、シュワルツの指示に基づき絵葉書を発行した<sup>1)</sup>。このほかの起源としては、一八七〇年普仏戦争の後、フランスの好事家の一部が戦役記念に絵葉書を作成したという説や、一八七八年に米国の青

年画家が写生旅行に出て、旅先から友人に絵葉書を送ったことに始まるという説、一八〇〇年代末にドイツの名所パウリヤのブラツサウの写真師が普通葉書の裏面に写真を焼き付けたことに始まるという説、一八八八年ドイツベルリンのフリードリヒ・フォン・ヘンデルという工業家が、その工場を写真に撮って葉書にして得意先に贈ったところ、絶大な宣伝効果を得たので、真似る人々が続出したことから嚆矢とする説などいくつもある。『通信事業史』<sup>2)</sup>には、郵便葉書について、一八六九年十月一日オーストリア・ハンガリー帝国の陸軍大学教授エマニエル・ヘルマンが、封書代の節約と封書にかかる手間を指摘し、カードを以って書状に代える案を提示し、通信局に受け入れられた説と、一八六五年カールスルーへの郵便会議で、ドイツ郵便の父フォン・ステファンが郵便葉書のことを記した文書を列席者に配布し、これが郵便葉書の考案の最初だとする説の二説があげられている。同書によれば、各国における郵便葉書採用は、

- ・一八七〇年六月二十五日 …… ドイツ
- ・同 年十月 一日 …… イギリス
- ・一八七一年 …… ベルギー、カナダ、デンマーク、フィンランド
- ・一八七二年 …… ノルウェー、スウェーデン、ロシア
- ・一八七三年 …… 日本、スペイン、フランス、北アメリカ
- ・一八七四年 …… ルクサンプブルグ、イタリア

とあり、ドイツが郵便葉書を最初に採用したとある。

日本で郵便制度が開始されたのは明治四（一八七二）年で、明治六年十一月十九日の太政官布告第三八九号による郵便葉書并封袋発行規則の発布により、現在の官製葉書が認可され、同年十二月一日に正式に「郵便葉書」が発

行された。

## 2. 絵葉書の形状

図1は、横浜にあった絵葉書問屋トンボ屋の絵葉書であるが、切手欄の横の「郵便ハカキ」の文字のほかに左側にいくつかの郵便葉書を表す用語が書かれている。そして、真ん中の「MADE IN JAPAN」の意味から、これは海外に向けて作られたものであることがわかる。図2は神田の上方屋のものであるが、これには万国郵便連合を示す「Union Postale Universelle」の記述がある。国外へ郵送する場合は葉書を製作する上で「万国郵便連合」を示す語を印刷しなければならぬ。このことから、国外用を意識して作成されているのが分かる。日本国内で発売された郵便葉書では、郵便葉書を表す用語ならびに表記として以下のものが使われている。

- ・日本語「郵便はかき（左から右への表記）／郵便はがき（郵便ハガキ）（左から右へ表記）／郵便はかき／郵便はがき」など
- ・仏語「CARTE POSTALE」／英語「POST CARD」
- ・独語「Postkarte」／伊語「Cartolina Postale」／露語「ОТКРЫТОЕ ПИСЬМО」

拙稿「折口信夫の歌舞伎絵葉書コレクションについての一考察」<sup>3)</sup>でも述べたが、ほとんどの絵葉書に仏語・英語表記がある。制作年代が古いと思われるものほど、仏語や他国の言語が多く見受けられ、近年になるほど英語と日本語の二言語表記となっていく。また、それに伴い、サイズも縦九〇×横一四〇（mm）という定型サイズから、縦一〇〇〜一一〇×横一五〇〜一八〇など大判サイズへと次第に変化していく。

また、絵葉書の問題の一つに、その制作年代の特定が難しいことがあげられる。包紙などに発行年が記されていれば別だが、被写体から時期を探るに

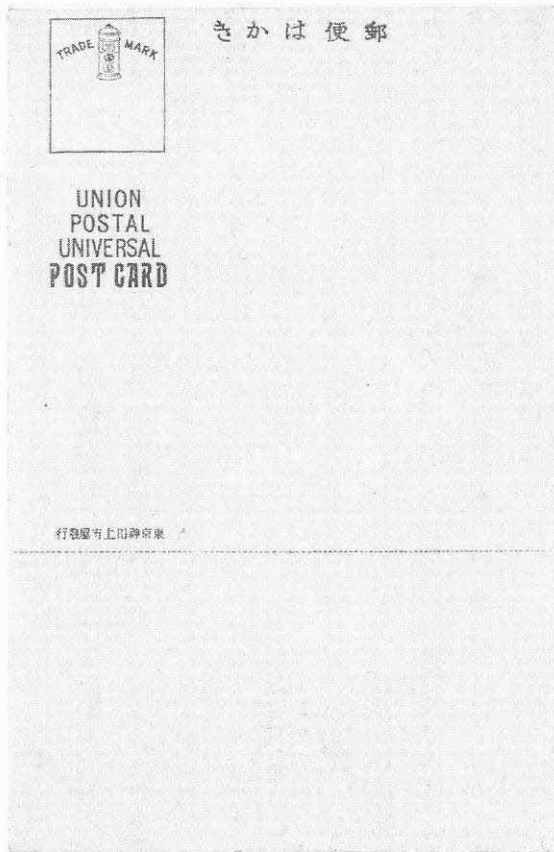


図2 上方屋

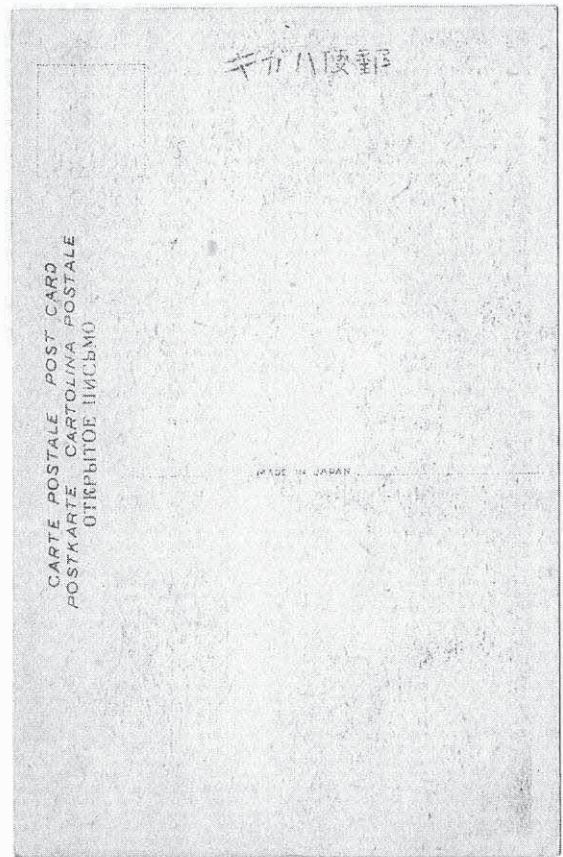


図1 トンボ屋

は問題も多い。印刷されている人物の服装や髪型、建造物や街路灯、企業看板等で判別をつけるにも、特定年次の判定は難しい。記念葉書でも、印刷された写真が撮られた年次と、絵葉書発行の年次は必ずしも一致しない。

この点について、平田健は年代の決定方法を、①作られた時代（絵葉書が印刷・発行された限定的時代と販売・流通していた幅を持つ時代）②使われた時代に大別し、②は明治に作製された絵葉書を今日使用することも可能であるため時代性を見出すことは難しく、①の印刷・発行された段階を第一次時代とし、それが判明しないものについては販売・流通していた時代を比定する方法を用いている。また、年代を決定できるのは、葉書か包紙自体に発行年月日であり、図柄がある限定された事件や出来事であること、また特殊通信日附・記念スタンプが押されていることなどがあげられる。この点は佐藤も述べるところである。

この絵葉書の年代の推定にはもう一つ、宛名面の郵便葉書の文字の向きや通信欄のサイズから類推する方法もあげられる。

- ・明治三十三年～明治三十九年 ……宛名面には住所氏名のみ記載の義務。記載の文字は右から左へ「郵便はかき」
- ・明治四〇年～大正六年 ……宛名面の通信欄部分が三分の一の記載
- ・大正七年～昭和七年 ……宛名面の通信欄部分が二分の一の記載に  
変更
- ・昭和八年～昭和十九年 ……右から左へ「郵便はかき」を右から左へ  
「郵便はがき」に変更
- ・昭和二〇年～ ……右から左へ「郵便はがき」を左から右へ

この分類にもとづけば、先に載せた図2は宛名面の通信欄が三分の一なので、明治四〇年～大正六年に発行されたものであること、図1は区切りが半分なので、大正七年～昭和七年のものと考えることができる。

### 3. 万国郵便連合加盟と私製葉書発行

明治六年の郵便葉書并封袋発行規則の発布の四年後、日本は明治一〇（一八七七）年二月十九日に万国郵便連合（UPU）に加盟する。万国郵便連合とは、一八七四年一〇月九日、国際郵便条約によって設立された郵便事業の国際組織で、本部はスイスのベルンに置かれている。日本加盟当時の他の加盟国は、アメリカ合衆国、イギリス、イタリア、インド、エジプト、オランダ、ギリシア、スイス、スウェーデン、スペイン、スリランカ、セルビア、ドイツ、トルコ、デンマーク、ノルウェー、ハンガリー、ベルギー、フランス、ポルトガル、香港、ルーマニア、ルクセンブルグ、ロシア、海峽植民地（マレー半島におけるイギリス植民地）、フランス植民地等である。日本は二十八番目で、アジア諸国としては初であった。第二次世界大戦中には脱退するも、一九四八年に再加盟している。

この万国郵便連合加盟を経て、明治三十三年三月に私製葉書認可に至る。郵便法が改正され、私製葉書でも官製葉書相当料金（国内は一銭五厘、国外は四銭）切手を貼れば送ることができるようになった。国外に送るものは、万国郵便連合の条約で定められた通り、サイズは縦九〇×横一四〇（mm）以内で、宛名面に政府発行の連合葉書を示す語である「万国郵便連合」もしくは「Union Postale Universelle」が印刷してあるものとされた。また図案は、当時絵葉書のデザインを行なった樋畑雪湖によれば国内外を別に考えられていたという。コロタイプ刷りの風俗絵のものは外人向けに、反対に国内には河鍋狂斎の漫画や安藤広重の風景画などが写真膠版とし、それに毛筆などで着色して加工したものが好まれていたようである。これにより、京都の便利堂、大阪の光村工芸出版、東京銀座の上方屋という絵葉書問屋が生まれ、次第に錦絵問屋の領域を侵し始めた。役者絵が写真に移行し始めたのもこの時期で、そのことについては「錦絵から写真へ」で渥美清太郎も述べるところである。私製葉書の始めについて石井研堂の『明治事物起源』にこんな記述が見られる。

明治三十三年十月一日より、私製絵葉書発行許可の通信省令あり。同日発行の「今世少年」第一巻九号に、石井研堂案、小島沖舟筆、二少年シヤボン玉を吹く図の彩色石版摺絵葉書を附録として読者に頒つ。これ私製絵葉書の始めなり。（『明治事物起源』）

とあり、雑誌の付録にすら絵葉書をつけることが可能となったことが分かる。

### 4. 絵葉書雑誌の発行

明治三十三（一九〇〇）年の私製葉書認可以降から徐々に絵葉書熱が高まり始めると、それに呼応するかのようになり明治三十七年から明治四〇年代にかけて、有楽社の『手紙雑誌』、交信社の『端書世界』、東京便利堂の『はがき新誌』、日本絵葉書会の『ハガキ文学』などの絵葉書を取り扱った雑誌が発行される。一例をあげるならば、明治三十七年に雑誌出版社の博文館を母体とした日本絵葉書会より創刊された『ハガキ文学』は、会則に「本会は端書の図案及短文学を研究推敲するを以て目的とし」とあるように、絵葉書の意匠と内容を雑誌の中心に据え、散文など文学作品も載せた。第一巻二号の目次を見ると、「口絵」の後に「時評」として「小泉八雲氏の死と井上博士」「文芸小言」など、時勢に沿ったエッセイの中に絵葉書やデザインに関する記事が並ぶ。タイトルをあげると、大愚居士「最も古るき絵葉書」、窪田重式「絵葉書論」、かほう「各国葉書誕生年表」、木村小船「懇談会」、梶原鬼呼「坪内逍遙」や、文学者中村星湖「陣中の恋」、大韓民国の史跡二八四号に指定された旧ソウル駅舎設計を手掛けた塚本靖「裝飾画家」、毛利家の文書を中心とした幕末維新史である『防長廻天史』の編纂を手掛けた笹川臨風「落葉がき」も掲載されており、次段では「ハガキ文学」と題し、読者から募った原稿を「普通文」「新体詩」「漢詩」「和歌」「俳句」「川柳」に分けて掲載している。この投稿については、絵葉書図案や趣味の投書のほか、会則に

\*会員の投書は左の規定に拠る事

原稿は約三百字以内とし政事的時事論に渉るべからず

原稿は字体を明瞭にし一種毎に別紙に認む事

用紙は端書又は端書の寸法の紙に限る

投書は一切返戻せず且他人の作物剽■を禁ず

投書は当分左の通り区別す………メ切毎月十日

論文 写生文 叙情文 書簡文 批評文

小品文 新体詩 和歌 漢詩 俳句

小説 日記 紀行 伝記 月且

評論 漫録、狂詩、狂歌、狂句

戯文、川柳、一口噺、短き雜文(、点は賞なし)

(\*執筆者注:■は文字が判読できなかったもの)

とあるように、文学方面に細かい区分けを設け内容を募っており、政治や時事と一線を画していたことがわかる。<sup>9)</sup>

この『ハガキ文学』は巖谷小波を筆頭に坪井正五郎、河野省三などが携わっており、他の執筆者では小説家坪内逍遙、法学者加藤正治(犀水)、詩人野口雨情、国文学者佐々醒雪、柳田國男などの多くの著名人の名が見える。賛助会員にも与謝野鉄幹、佐々木信綱、小山内薫、美濃部達吉らがいて、明治四十一年十一月に廃刊となるまで、当時の絵葉書研究の一翼を担っていた。佐藤健二はこの絵葉書雑誌などを含む絵葉書研究史を三期に分けて考察している。それによれば、一九〇五〜一〇年代初頭にかけてが第一のまとまりで、日本における絵葉書文化誕生の同時代であるとし、日本絵葉書会の『ハガキ文学』での活動を基礎に編纂された『絵葉書趣味』などがその広がり物語ると述べ、雑誌の寄稿者に柳田國男や坪井正五郎がいたことをあげる。

一九三〇年代には、回顧的な関心から市島春城や伊東竹翠などの趣味人が著書で絵葉書に言及しており、実際通信省で絵葉書発行業務に携わった樋畑雪

湖の回顧録『日本絵葉書史潮』も第二期のこの時期であるとする。そして第三期は戦後で、一九八〇年代前後から、収集家のコレクションを編集し出版する中での考察や、写真グラフィズム史からの解説から起こった。佐藤はここで江戸東京博物館にコレクションが収蔵されている喜多川周之の研究や、『絵葉書 明治・大正・昭和』の小森孝之、『関東編一街・明治大正昭和絵葉書にみる日本近代都市の歩み』の尾形光彦、『絵葉書に見る郷愁の日光』の石井敏夫らの名をあげ、各人が収集した絵葉書集成を元に時代を読み解く過程を述べるとともに、一方で『肖像の中の権力』で図像が内包する情報から時代や社会のシステムを探ろうとする柏木博のような欧米のグラフィズムに通じた論者や、近代のデザイン文化史から絵葉書を見直す榎野八束などの存在をあげ、画像メディアとしての絵葉書が捉え直される面も指摘している。<sup>10)</sup>近年では、新潟県立博物館所蔵の笹川コレクションを中心に、絵葉書の持つマスメディア性について述べた田邊幹の「メディアとしての絵葉書」、考古学の絵葉書資料をとりあげ当時の考古界の動向を述べた平田健の「日本考古学絵葉書百景 明治時代篇」<sup>11)</sup>などがある。

## 5. 記念葉書の発行

絵葉書雑誌の発行ラッシュから遡ること約二年、私製葉書認可の二年後に日本は万国郵便連合加盟二十五周年を迎え、初の記念絵葉書を発行する。デザインは樋畑雪湖で、製版は写真銅版一色刷りの六枚一組で発行数は四〇万ほどであった。この時の記念スタンプが盛況で、人々は羽織の裏や女帯にまで押捺して貰うために郵便局の窓口に殺到した<sup>12)</sup>というのである。銀座の松屋呉服店ではこの絵葉書を友禅染として売り出した<sup>13)</sup>というから、その人気が如何ほどのものであったか想像に難くない。しかし一部の消費者には、絵葉書の出来はあまり評価できなかったようで、巖谷小波は「画葉書私観」の中で「寧ろ恥を万国に爆らしたお手際」などと酷評している。<sup>14)</sup>

記念絵葉書発行で一大ブームを生んだのは、明治三十七(一九〇四)年に

起こった日露戦争絵葉書である。同年二月六日に国交断絶、同月一〇日に宣戦、六月二〇日に満州郡総司令部設置、八月十九日旅順総攻撃開始を経て九月四日に遼陽の占領となるが、翌九月五日には、「明治三十七年戦役 紀念郵便絵葉書」が逓信省から発行されている。用意された五枚一組十二銭の二十六万五〇〇〇組は即完売、その場で四倍近くの五〇銭のプレミアがつくほどであった。その三日後には十五万組が追加発売されている。また、明治三十九年五月六日の第五回紀念絵葉書発行の郵便局の状況も、三、四万人の群衆が詰め掛け、大混乱に陥った人々にポンプで水をかけたり、医師がかけつける程の大騒ぎになったといふ<sup>(15)</sup>。

これほどの盛況を見せた戦勝絵葉書は、明治三十七年十二月に第二回発行、翌三十八年の二月十一日に第三回として、「旅順口の部」・「遼陽の部」・「海軍の部」・「天長節の部」・「赤十字事業の部」の五種類を十三万四〇〇〇組発行し、同年一〇月十五日には第四回として、「旅順口の部」・「沙河の部」・「奉天の部」・「交通の部」・「海軍の部」の五種類を十四万組発行している。

日露戦争絵葉書がブームの要因であることは、多くの絵葉書研究書で述べられている<sup>(16)</sup>。また、明治三十七年二月に軍事郵便規則が發布され、その四条において、出征軍人には逓信省が出征各軍の野戦郵便部を作り、各部隊に軍事郵便を配給することになった。軍事郵便は戦地から送るのは無料であったため、階級により回数制限はあったものの、内地すなわち日本国内と、戦地で盛んにやりとりがされた。軍人の慰問葉書は何も官製葉書に限ったことではなく、明治三十七年一〇月一日に創刊された『ハガキ文学』には「▲近來戦地へ兼て貰ひ置きし写真を印刷して絵葉書となし贈呈したるに金鶏より有難かりしと申来りき▲されば会員諸君!! 諸君の同胞親戚にして一家団欒の写真を葉書に印刷して戦地軍人に廻信せらるれば受信者は如何なる感あるか吾人想像の及ばざる所なるべしと思ふ」という記事や、広告に「出征軍人最良進物」とあり、官民一丸となって絵葉書の発行に携わっていたことが伺える<sup>(17)</sup>。

また、佐藤健二は「絵葉書覚書」の中で、このブームの要因の一つとして、絵葉書刊行のバックに政府が付き、国をあげての大量発行を行なったのが大きいことを述べている<sup>(18)</sup>。

## 二. 学術研究と絵葉書

私製葉書の認可以来、多種類の絵葉書が発行された。大場資料の中にもあるが天皇崩御や遊学、肖像などを題材とした皇族の動向を追った皇室絵葉書、関東大震災や洪水など災害を題材とした災害絵葉書、デパートや商品の宣伝を主とした、現代のアドカードのような広告絵葉書、折口信夫も蒐集した歌舞伎役者や新劇役者を取り扱った歌舞伎絵葉書、芸者を扱った美人絵葉書、神社の社殿や神事を取り扱った神社絵葉書、現代でも観光地で売られている名所旧跡を扱った名所絵葉書など、その種類をあげればきりが無い。

このような絵葉書はまた、研究者にとって資料としても用いられたのである。絵葉書が研究資料として扱われた一例として坪井正五郎の記述がある。

日頃心掛けて居る人類学研究に於ては、諸人種の容貌体格風俗等の写真絵画が入用で、常に其蒐集に意を用ひて居ましたが、どうも思ふ様に行きませんでした。然るに「絵はがき」の流行以来、在外知人から参考となるべきものを続々送つて呉れるので誠に好都合で有ります。

「絵はがき」の効能は色々有りませうが、私の利益を感じて居る事の最も深いのは此点で有ります。

(坪井正五郎「葉書についての葉書たより」)

坪井は人類学的資料入手の一方法として絵葉書が有効であることを指摘し、写真とは異なり郵送できることから資料を入手する簡便な手段であることを述べている。写真が人類学の研究に不可欠なものであることは「人種研究材

料としての側面輪郭図<sup>19)</sup>で、

人種研究には面部に関する材料の多きを望む次第であります。夫れに就いては生体死体の実物も有り、模型写真の写しもあります。何れかの一種でも宜し、彼れ此れ打ち混してでも宜し、要は数多く集めるに在るのであります。実物は勿論最も慥な材料には相違ありませんが比較の爲めに保存して置くと云ふ事が出来ず、多くの模型を作るのも容易な業で有りません。斯く考へて見ると写真が一番肝要なものと成りますが、(以下略)

というように指摘する。このほか、「ハガキ文学」や『手紙雑誌』に年賀葉書の図案や、絵葉書の書き方や作り方を寄稿し、活用方法については始業祝い、結婚祝い、出産祝いなど多くの例示をあげて、それぞれの図案や文面を例示している。

坪井は絵葉書の製作にも携わっている。明治時代から発行された考古学の絵葉書がそれである。明治三十九(一九〇六)年に初めて出版された絵葉書は、坪井の所属する東京人類学会と東京帝室博物館、考古学会によって企画・編集された。そしてそれは明治四十年以降、各地の歴史系学会や博物館などに波及していくのである。

平田健はこの明治期に発行された考古学の絵葉書を、資料絵葉書、目録絵葉書、記念品絵葉書、調査報告絵葉書の四種類に分類している。平田によれば、資料絵葉書とは明治三十九年前後に刊行され、六枚一組など複数枚で構成されシリーズとして継続的に発行されたもので、発行機関の所蔵資料や地域の文化財・史蹟を図案とする。明治三十九年発行の東京帝室博物館『歴史絵葉書』、同じく東京人類学会『人類学絵はがき』、明治四十年以降には、広島尚古会『尚古絵葉書』、明治四十一年に知新堂書店『筑後史料絵葉書』、明治四十二年のピリカ会『アイヌ風俗写真エハカキ』などがそれにあたる。個

人でいえば、明治三十九年に大野雲外が日本石器時代の土器の紋様を拔出した『石器時代紋様絵端書』は「石器時代の研究者などには定めて、歓迎せらる、べし」とされ、また大正五年の『人類学雑誌』三十一―四<sup>20)</sup>には大野が発行した人種紋様と題した古墳関係の遺物が取り上げられ、「斯学の研究には云ふまでもなく、工芸美術上の好参考図たるを失はない」と評価を受けている。大正十三年には人類学会会員の伊藤兵三が発行した『長野県下伊那郡考古絵葉書』がある<sup>21)</sup>。

目録絵葉書は、同種乃至同時期の遺物を扱い、継続的に発行されたものである。平田は例として明治四十一年『古瓦絵葉書』第一輯、第二輯をあげている。これは六枚一組で構成され、一枚の絵葉書に同時代の瓦写真を複数点掲載しており、資料絵葉書と異なる点は、遺物の出土地(寺院名)や寺院建立年、各々の瓦の直径・幅が明記されて点で研究資料としての意識を認めている。

記念品絵葉書は、学会の創立や総会を記念して作成されたもので、一枚乃至は二枚一組で構成され、当日配布されたものが多いようである。記念品絵葉書を継続的に発行したのは考古学会であり、明治三十九年十一月二十四日の考古学会例会で和田千吉が古瓦瓦経を葉書に墨摺りして配布したのを皮切りに、明治四十年の第十二回総集会以降は志村写真印刷所の提供で本格的な絵葉書が発行されている。

調査報告絵葉書は、その名の通り調査報告を補う形で発行された絵葉書である。当時、遺跡の発見や発掘調査概報は雑誌に発表されたり、新聞に取り上げられたりした。調査報告を絵葉書というのは、これを補うように発行されたのである。明治四十二年の瓢箪山遺跡保存会の『神奈川県駒岡横穴関係絵はがき』もその一つで、十二枚一組で発行された。横穴の外形、内部遺物配列、埴輪土偶、発見遺物という内容である。この駒岡横穴は坪井正五郎と大野雲外が調査を行なった岩瀬山横穴のことで、『考古界』に短報が掲載されているが、写真資料は掲載されていない。この絵葉書は『東京人類学雑誌』



第二七五号の雑報に載っており「此遺跡の事を知るに於て益有るのみならず、是等の写真は広く本邦古墳関係事項を調査し若しくは説明するにも大に参考とすべきものなり。」とあるように写真資料として有益である旨を述べている。絵葉書が報告書の図版の役割を果たしていたのである。<sup>(24)</sup>

他に研究者が関わった例としては、高橋健自が実際に講義に用いるように絵葉書を調整した例もある。高橋は東京美術学校において、風俗史の講義を担当しており、その講義で絵葉書を使用していたことが、絵葉書に記された「東京美術学校特殊研究講義高橋講師用」の文字から読み取れる。また、高橋健自の著作を復刻した石田茂作は「私の博物館に入った頃は、そうした研究（執筆者注：考古学的な遺物本位の服飾研究）に最も熱心であった時代で、それらの資料を絵葉書に作り、それをもって美術学校の講義をされていた」と述べており、絵葉書が写真資料として講義で使用できるほどのクオリティを備えていたことがわかる。同様なものとしては、横浜の上田写真版合資会社で出された『人種絵はがき』である。『人類学雑誌』二十九一五の「雑報」には東京帝国大学人類学教室所蔵の写真類で製作し、選定と解説を同教室の松村瞭が行なったという記述から「一見直ちに在来の絵はがきと其類を異にせるものたるを知るべし」とし、「されば、本絵はがきの如きは、音に通信用としてのみならず、家庭教育用として保有する価値あるものたるは勿論、諸学校に於ける地理学教授の参考として書架に飾るべきものたりと信ず」としており、学校教授が監修した絵葉書は教育に用いるに不足はなかったのである。<sup>(25)</sup>

### 三. 大場磐雄資料の中の絵葉書

#### 1. 大場磐雄資料の概要

まず、大場資料の概要について述べたい。大場磐雄博士資料の整理は、平成十一年度～平成十七年度に國學院大學学術フロンティア構想「劣化画像の

再生活用と資料化に関する基礎的研究」において進められ、平成十九（二〇〇七）年に文部科学省オーブンリサーチセンター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」プロジェクトに引き継がれた。

資料は図書資料・写真資料・資料カード類等に分類されている。まず、図書資料は國學院大學図書館によって整理が行なわれ、目録が刊行されている。<sup>(26)</sup> 内訳は単行本五〇四九冊、抜刷一〇八五冊、雑誌七五六種、展覧会等目録二八二冊であり、「楽石文庫」として利用可能となっている。写真原版資料は大場磐雄自らが撮影したものが大部分を占めると思われるものである。五〇〇〇点近いガラス乾板は、平成十一年度からの学術フロンティア事業によつて整理・公開が行われており、<sup>(27)</sup> 著述や調査歴に応じて初期には縄文時代の遺物や神社神宝類、その後は古墳・集落遺跡のものが多く、ほぼ全点にメモが付されている。資料カード類は、時代を問わず写真・拓本・絵葉書・図版・メモなどを主として台紙に貼り付け、保管ケース・文類袋に分類して整理されたものである。内容は考古資料にとどまらず、多岐にわたっている。I. 旧石器時代編一箱、II. 縄文時代編十八箱、III. 弥生時代編十三箱、IV. 古墳時代編三十二箱は『大場磐雄博士資料目録I』、V. 歴史時代編五十四箱は平成十五・十六年度学術フロンティア事業の事業報告において公表している。<sup>(28)</sup> また、平成二十二年にはVI. 祭祀編四十二箱、VII. 民俗編一箱、VIII. 外国編六箱、IX. 十二支編三箱、X. その他三箱をまとめた『大場磐雄資料目録II』が刊行された。

#### 2. 大場磐雄資料の絵葉書

先も述べたように、大場資料の中には絵葉書資料が多く存在する。中でも、絵葉書をカードに貼りつけ資料として整理されたものは、封筒や箱の中に細かく内容別に分類されている。先に刊行された『大場磐雄博士資料目録II』を例にとれば、カードに絵葉書が貼られ資料化されたものが六二五点あった。絵葉書は一つの袋にまとめて整理されているわけではなく、山や社殿、湖沼、

岩、出土遺物など研究対象ごとに他の写真や絵図などとともにカードに貼りこまれ、メモが付されている。カードは図3のように、絵葉書が上下に配置され、資料右に手書きメモが付され、しっかりと宛名面を糊付けしてあることから絵葉書としての用途ではなく写真資料として研究に用いられていたことが分かる。

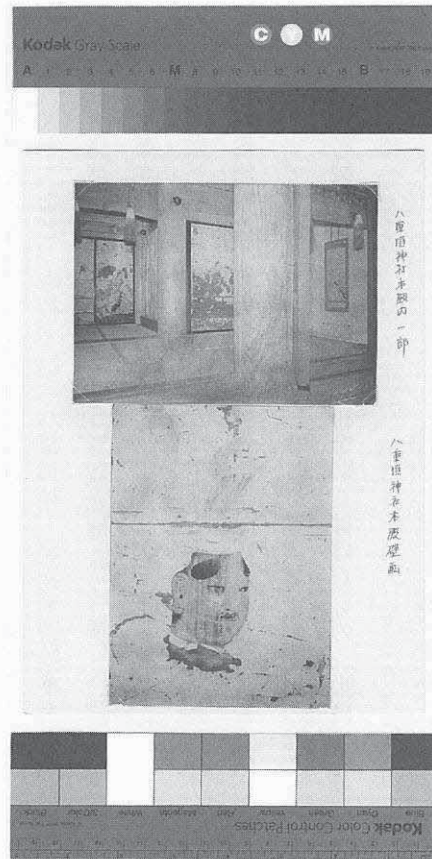


図3 カード (oy-s007/oy-s008)

今回とり上げる絵葉書は、カードに貼られておらず、県別・種類別に箱に収められある程度大きなまとまりとして収蔵されていた資料である。絵葉書はパンフレット類とあわせ、個別に箱に整理されたもの十六箱及び数点のものからなる。十六箱中十一箱が絵葉書資料、五箱がパンフレット資料となる。箱の内容は以下の通りである。

\*絵葉書資料

- ①「北海道 東北」／②「関東」／③「中部」／④「北陸 東海」／⑤「中部 (山梨 岐阜 長野)」／⑥「近畿 山陰 山陽」／⑦「四国 九州 台湾」／⑧「絵葉書 寺院 (二)」／⑨「絵葉書 神社 (二)」／⑩「ゑはがき (雑)」／⑪「絵葉書 雑 (二)」

\*パンフレット資料

- ⑫「案内書 北海道 東北 北陸」／⑬「案内図 関東」／⑭「案内書 中部 東海」／⑮「案内記 近畿」／⑯「案内図 四国 山陰 山陽 九州」

整理箱として用いられていたものは、二五〇×一八〇×五〇(㎜)の古事類苑の空箱、三〇五×二二五×七〇(㎜)の空箱の二種類である。絵葉書資料は、箱上部に「関東」、「中部」「北陸 東海」など地域名を書き込み、側面に関東地域の資料の場合は「ゑはがき(関東)」、中部東海地方の資料の場合は「ゑはがき類 中部東海」「ゑはがき類」「ゑはがき 中部東海」などが明記され整理が行なわれている。パンフレット資料は「案内書」「案内図」と表記され、絵葉書資料ほど細かくはないが、こちらも地域ごとに整理されている。また、関東の絵葉書箱には「草稿 三十 白濱神社」、四国の絵葉書箱には「乾板 十三」などの文字が見え、絵葉書資料を整理する前は他の資料の整理箱として活用された形跡が見える。

資料の内訳は、絵葉書資料：三二七三点(絵葉書集：四七〇集・バラ資料：三二九点)、写真資料：三五五点、パンフレット：五二九点、その他として、しおり：五点、新聞：一点であった。パンフレット資料は対象としないため、今回はこれ以上述べないこととする。

絵葉書のサイズは、九〇×一四〇～一〇〇×一五〇の大判サイズがあり、発行年代と合わせて見ると、九〇×一四〇前後サイズは「木更津絵葉書」の昭和十三(一九三八)年など明治～第二次大戦前、一〇〇×一五〇サイズのもの「観光の千葉」の昭和四十五(一九七〇)年など戦後以降という傾向が見られる。

●整理傾向と内容

整理箱の内容は、皇室、名所、寺社、観光地・景勝地、風俗、小唄、記念

など種類は多岐にわたる。県別に整理されたものは、名所・名勝・公園・風景など景色が内容の中心だが、社寺や美術に関する内容のものが確認できる。

神社・寺院は別に箱を設け地域関係なく三箱に収められている。この社寺を整理した箱には、「寺院(一)」「寺院(二)」の記載があり、このことから元は「神社(二)」に加えて「神社(一)」箱が存在したと推測できる。雑と書かれた二箱は、包紙に入っていないバラの絵葉書が中心に整理され、内容も寺社や名所・旧跡以外のものである。昭和十二年二月六日に行なわれた芳賀矢一の胸像除幕式十年祭における絵葉書や、明治天皇の御大葬記念の際に発行された絵葉書、帝国議会議事堂の絵葉書など記念ものや建築物、オペラ館の新派活劇が題材の絵葉書、南極探検の絵葉書、そして帝国美術院や文部省美術展覧会の絵葉書など、大場自身の研究とは直接関係がない内容のものが確認できる。年賀状や海外からの来簡もこの箱に整理されている。

具体的には、皇室関係は「聖上陛下御尊影」(図4)名所では「新潟名所」、「岩槻名所」(図5)など、寺社では「八幡神社 姥捨名勝絵葉書」、「別格官幣社 佐嘉神社 御造営記念絵葉書」(図6)、観光地・景勝地では「湯河原温泉」、「富士山頂上絵葉書」(図7)、風俗は、静岡県の風俗を取り扱った「島の風俗」、展覧会系では三越呉服店で行われた風俗博覧会の際に発行された「三菱呉服店 世界風俗博覧会 世界風俗 第二集」(図8)、記念葉書では、大場自身が教鞭をとっていた正則中学校(図9)や横浜第二中学校の絵葉書などがある。また、布製(図10)や、押し花を貼り付けたもの(図11)など珍しい絵葉書も確認できる。宛名面の「CARTE POSTALE」の上に「SHYOKUBUTSU」の文字と「実用新案登録」の文字が見え、押し花絵葉書が新案登録されたものであったことがわかる。

また、包紙に明記された枚数と何点か中身の数が合致しない資料もあり、使用された形跡が見受けられる。

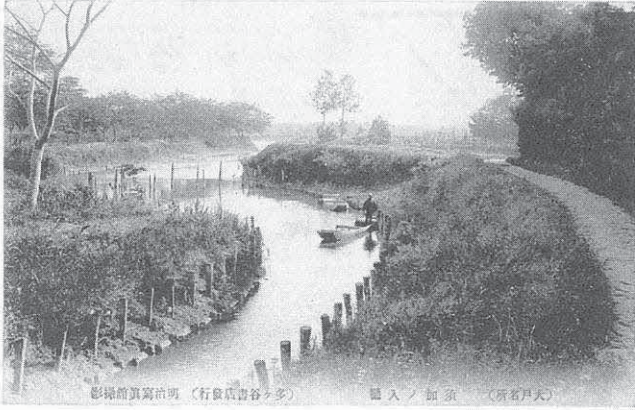


図5 岩槻名所



図4 聖上陛下御尊影



図7 富士山頂上繪葉書

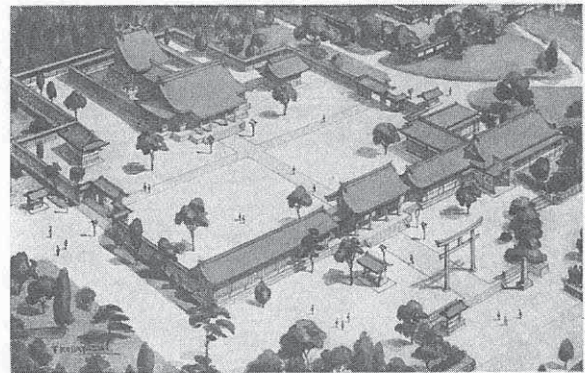


図6 別格官幣社佐嘉神社 御造営記念繪葉書

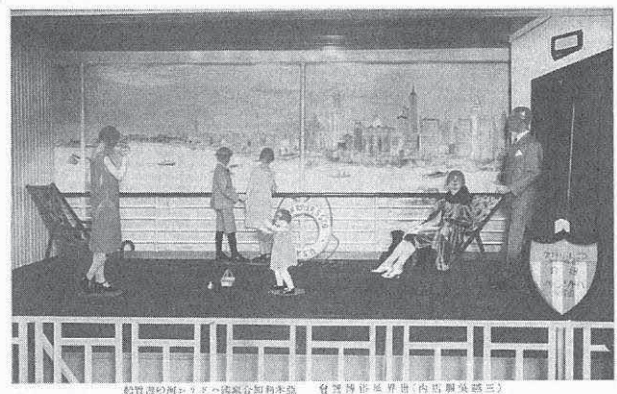


図8 三越呉服店 世界風俗博覧会 世界風俗 第二集

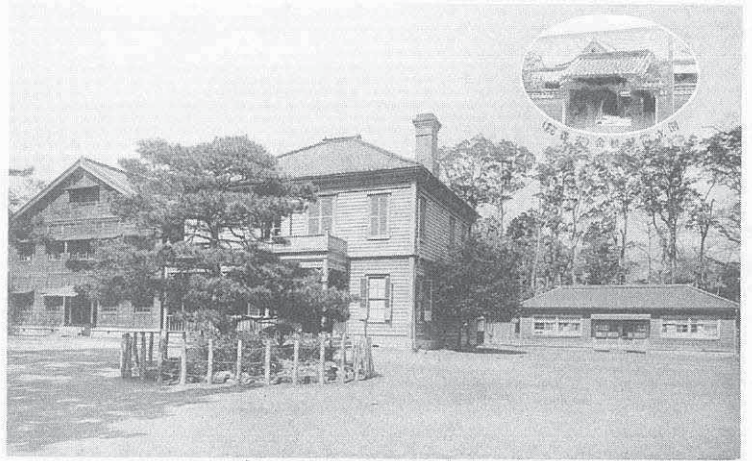


図9 正則中学校

念記年周五十二立創校學中則正

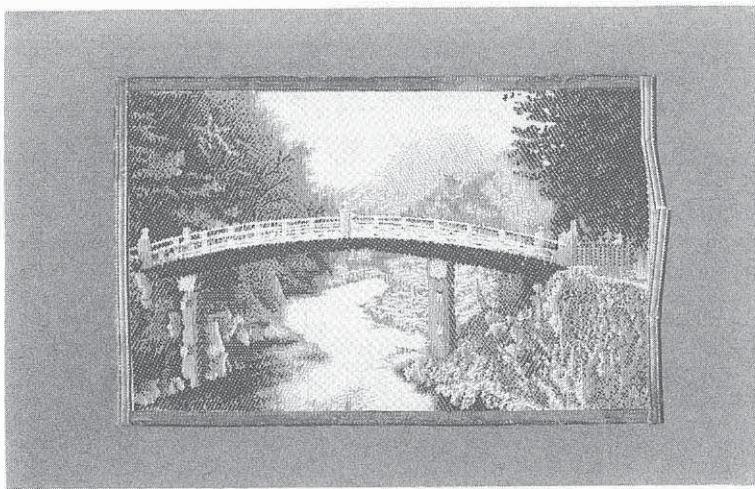


図10 布製絵葉書



図11・12 押し花絵葉書

●書込みについて

絵葉書への書込みについては、自筆他筆ともに確認ができる。包紙に「水戸名所ゑはがき」(図13)とあるものには「大正七年九月十五日夕 邊田君熊本へゆかむとてわが家にたちよられて送りたまへるもの」と、いつ誰から貰ったかというメモ、「立山全集絵葉書」には「大葉先生ニ御贈呈 師三ノ一二十三番 鈴木外麿」(図14)と、送り主自身が大場へ謹呈の意を記しているものもある。また、「遠刈田温泉場名所絵はがき」(図15)のように人名が確認できるものもある。名前には鳥居・折口など見えるが、折口の年譜によれば折口が遠刈田に行ったのは昭和十三(一九三八)年十二月である。大場の日記などには昭和十三年十二月時点の遠刈田行きの記事はないが、もしこれが昭和十三年時のものであるならば、折口の年譜の方にも同行者の記述はないため、同行者が明らかとなる資料になるのではないだろうか。

絵葉書の書込みは、大場の旅先からの近況報告や年賀状、他所からの来簡などのほか、図16のように写真面に山の名称を書き込んだものや、図17は葉書左隅の部分に家の形の印、図18は右上部中ほどに丸印のように、遺跡の位置をマークしたものが他に数点確認できる。中でも、遺跡の位置をマークしたものは図17、21の全部で五点あり、「(甲) 南豆勝地 河津名所」の中に納められていた。マークされた遺跡は、静岡県にある見高段間遺跡で、絵葉書はその遺跡部分を今井浜(伊豆舞子浜) 附近からと麓に近い見高港の辺りから遠望するように撮影されたものである。

絵葉書には遺跡位置にマークのほか、「赤印 学校所在地」(図17)、「小学校敷地」(図20)など、遺跡の位置に何があるか書き込みがなされている。見高段間遺跡は、大正十四年、静岡県賀茂郡河津町見高の見高小学校(現河津町立東小学校)の敷地造成に伴い発見された遺跡である。当時の校長土屋宗吾によって遺物の収集や遺構の保存がなされ、大場調査以前には、後藤肅堂の「考古学上富士山下民族分布論に就いて(下)」<sup>28)</sup>、昭和二年二月に静岡県史

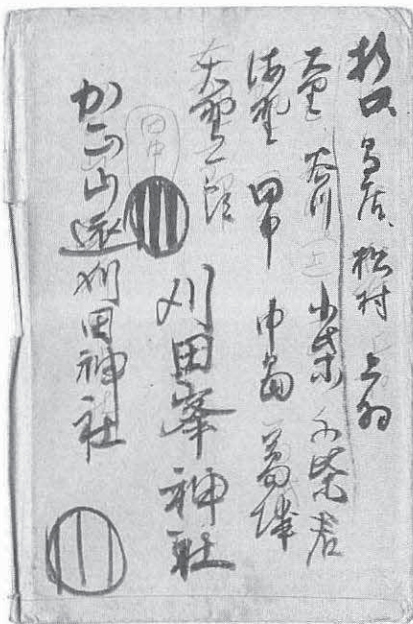


図15 遠刈田温泉場名所絵はがき

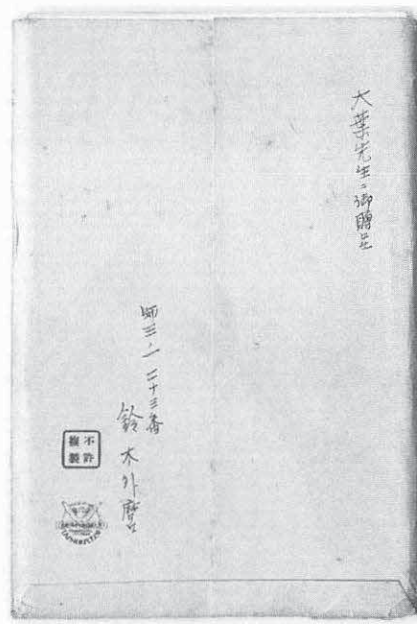


図14 立山全集絵葉書

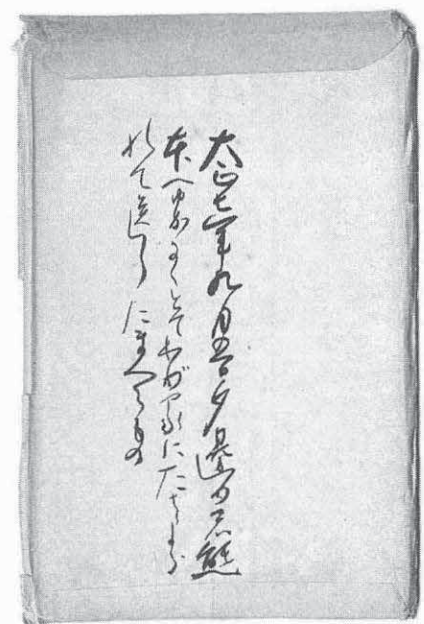


図13 水戸名所ゑはがき



〔津市 津町直津六人第地部全同生翠竹900〕

港漁貝布村崎富 (所名房安)

図16



図17



図18



図19



図20

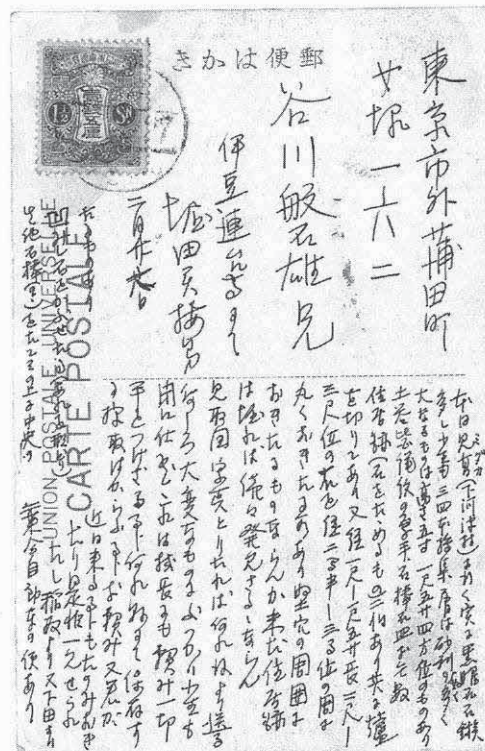


図21-1



図21-2



跡調査委員の足立敏太郎・堀田美桜男が調査に入った「南豆の遺蹟遺物につきて」<sup>(20)</sup>、同年三月の中谷治宇二郎による調査報告の「南伊豆に於ける考古学的資料」などの概要報告がある。大場自身が調査に入ったのは、昭和二年三月中旬のことで、『楽石雜筆』の「南豆行き」と「南豆見高石器時代住居跡の研究」<sup>(21)</sup>によれば、三月・四月・六月の三回にわたって調査を行なったことがわかる。

図21―1は先に調査に入った堀田美桜男からの葉書で、二月二十八日の日付があることから大場が調査に入る二週間前のものであることが分かる。通信欄には、

東京市外蒲田町女塚一六二

谷川磐雄兄

伊豆蓮台寺にて

堀田美桜男

二月二十八日

本日見高（下河津村）に行く 実に黒曜石石鏃多し 小生も三四本採集 屑は砂利の如く多く 大なるものは高さ五寸一尺五寸四方位のものもあり 土器皆縄文の厚手、石棒石皿も無数 住居跡（石をたゝめるもの）二個あり 共に炉を切りてあり 又径一尺五寸長二尺一 三尺位の石を径二間半―三間位の周に 丸くおきたる所あり堅穴の周囲に おきたるものならんか 未だ住居跡は 掘れば続々発見さるるならん

見取写真とりたれば何れ後より送る 何しろ大変なものにぶつかり 小生も

閉口仕候 これは村長にも頼み一切

手をつけざる事 何れ県にて保存す

る様取はからふ事頼み又君が

近日来る事もたのみおきたり是非一見せられ

たし 稲取より又下田より

乗合自動車の便あり

その他石棒（？）をたてその上に中央の

凹みし石をかぶせたる（あれを形どり）たるものあり

というように、大場が三月の調査に来る前に、堀田より見高遺跡の大体の概要が連絡されている。

絵葉書の写真面には、堀田自身が見高遺跡の位置を示しており、大場自身でも同じ内容の絵葉書左隅に遺跡の位置をマーキングしている（図21―2）。このような数枚にわたる今井浜方向からの絵葉書への見高遺跡の書込みは、大場の遺跡への強い関心が窺い知れる資料と言える。

また、先に触れた包紙に明記された枚数と中身が合致しない資料については、カード化された資料の絵葉書と突き合わせると、何点か抜け落ちた絵葉書とカード化された絵葉書資料との規格が同じものが認められる。富士浅間社のカードに使用された絵葉書は「神社（二）」の箱から出たものであることが、宛名面の規格や絵はがき写真面の状態から明らかである。この点から、可能性の一つにすぎないが、カード化した絵葉書の残りを地域別に整理することで、再度の利用を見込んだ可能性も考えられるのではないだろうか。

## おわりに

以上、絵葉書史を整理しながら、箱に整理された大場磐雄の絵葉書資料群を概観してきた。

私製葉書誕生後の日露戦争で、国の政策も手伝い、絵葉書は爆発的に流行した。数々の絵葉書雑誌が創刊され、絵葉書の製作には国だけではなく国民も携わり、多くの絵葉書が発行された。日本の歴史や風景を切り出した名所旧跡や歴史の絵葉書、商品や店の宣伝を目的に製作された広告絵葉書、透かしや布張りなど仕掛けや意匠に凝った美術的な絵葉書、また神社の遷宮や建物の新築改築に際しても発行された。そして、絵葉書が求められた理由の要因の一つは、錦絵のように描かれた素材ではなく、写真という鮮明な性質を擁した素材を用いていたことがあげられ、リアルを求める人々によって戦争絵葉書や震災・災害絵葉書などがニュース媒体として発行された。また、写真の持つ鮮明な情報から研究者の研究資料としても活用された。考古資料を例にとれば、坪井正五郎は写真が人類学の研究に不可欠なものであることを述べた上で、人類学的資料入手の一方法として、郵送できることから資料を入手する簡便な手段を持つ絵葉書が有効であることを指摘しているし、明治三十九年に大野雲外が日本石器時代の土器の紋様を抜出して発行した『石器時代紋様絵端書』は、石器時代の研究者などにとって価値があるものであった。

大場絵葉書資料群は、整理箱の内容は、皇室、名所、神社、観光地・景勝地、風俗、小唄、記念など種類は多岐にわたっており、県別に整理されたものは、名所・名勝・公園・風景など景色が内容の中心で、神社・寺院関係は別に箱を設けて整理されていた。雑と書かれた二箱は、包紙に入っていないバラの絵葉書が中心に整理され、内容も神社や名所・旧跡以外のものである記念ものや建築物、オペラ館の新派活劇が題材の絵葉書など大場の研究とは直接関係がない内容であった。書込みについては、絵葉書・包紙両方ともに

自筆及び他筆の確認ができ、覚書らしきメモのほか、写真面に山の名称を書き込んだものや、遺跡の位置をマークキングしたものが数点ほど確認できた。マークキングされたものは全部で五点あり、全て静岡県にある見高段間遺跡に関するものである。写真は今井浜（伊豆舞子浜）付近からと、麓に近い見高港の辺りから遠望するように撮られたもので遺跡の配置が捉えられている。絵葉書にはマークキングのほか、遺跡がどの場所にあるかを示した「赤印学校所在地」の書込みが見え、また先に南豆調査を行なった堀田美桜男からの絵葉書と同絵葉書に遺跡位置をマークキングしていることから、大場の見高遺跡への関心が窺える。

また、包紙に明記された枚数と中身が何点か合致しない資料があり、使用された形跡が見受けられる問題については、推測の域を出ないが、富士浅間社の例のように、抜け落ちた絵葉書とカード化された絵葉書資料との規格が同じものが認められる。カード化された絵葉書は写真資料として個別に整理されていることから、大場にとっても絵葉書は貴重な資料であったことがいえるだろう。

以上のことから、整理箱に整理されている絵葉書資料群は、カード化された写真資料としての絵葉書資料の残りが地域別に整理されたものであった可能性が考えられ、個人的な書類ではなく、堀田美桜男とのやりとりやそれに伴う見高の絵葉書への書き込みなどからも、調査資料としての性質を有していると考えられる。

末筆ながら、本稿作成にあたり、杉山章子氏に多大なるご協力を頂いた。厚く御礼申しあげます。

## 引用・参考文献

明治文化研究会編 『明治事物起源』（『明治文化全集』別巻） 日本評論社 一九六九

- 宮武外骨編 『震災画報』 半狂堂 一九二四  
 内田茂文 『大正大震火之記念』 毎日通信社経済調査部 一九二三  
 現代史の会編 『ドキュメント関東大震災』 草風館 一九九三  
 橋爪紳也 『絵はがき100年』 朝日新聞社 二〇〇六  
 木村松夫・石井敏雄編著 『絵はがきが語る関東大震災』 柘植書房 一九九〇  
 佐藤健二 『絵はがきのメディア性』(小林新造編『江戸東京学への招待』)『文化誌篇』  
 日本放送出版協会 一九九五 所収)

注

- (1) 小川寿一 『日本絵葉書小史(明治篇)』 表現社 一九九〇  
 (2) 通信省編 『通信事業史』 第二卷 通信協会 一九四〇  
 (3) 拙稿『折口信夫博士歌舞伎絵葉書コレクションについての一考察』(『伝統文化リサーチセンター』第一号 國學院大學研究開発推進機構 二〇〇九所収)  
 (4) 平田健 『日本考古学絵葉書百景 明治時代篇』(『考古学集刊』 明治大学文学部考古学研究室 二〇〇八)  
 (5) 佐藤健二 『絵葉書覚書』(『風景の生産 風景の解放 メディアのアルケオロジ』 講談社 一九九四)  
 (6) 生田誠編・著 『麗しき日本絵葉書 一〇〇の世界』 日本郵趣出版 二〇〇九  
 (7) 樋畑雪湖 『日本絵葉書史潮』 日本郵券倶楽部 一九三六  
 (8) 『明治二十年頃には写真銅版の技術も完成したので、俳優の写真は雑誌の口絵や新聞へ掲載されるやうになり、これが似顔画へ甚大な影響を与へたのである。新川の鹿島清兵衛が写真術に凝り、道楽半分に仕事として始めた写真館で盛んに俳優の舞台姿を撮影したが、明治廿九年に団十郎が歌舞伎座で「暫」を演じた時には、千秋楽の日に看客席へ機械を据え、俳優の居並んだ舞台面を其まま撮影した。これが舞台撮影の嚆矢である。(中略)俳優の写真はコロタイプに製版し「絵葉書」として売り出すやうになつたのは、明治三十七年頃からだ。これが絵草紙屋の錦絵に致命的な打撃を与へ、遂にそれを亡ぼすまでに発展したのである。震災後はコロタイプが直接端書版の紙へ焼きつけたものと変り、今に及んでゐる。」渥美清太郎 『歌舞伎大全』 新大衆社 一九四三
- (9) 『ハガキ文学』 一一二 日本葉書会 一九〇四  
 (10) 前出『絵はがき覚書』  
 (11) 新潟県立歴史博物館編 『新潟県立歴史博物館研究紀要』 第3号 二〇〇二  
 (12) 『考古学集刊』 明治大学文学部考古学研究室 二〇〇八  
 (13) 「この前、通信省から万国郵便連合加盟二十五年祝典記念の絵葉書を発行した時、神田の松屋から祝典記念絵葉書友禅染と言ふのを売出したが、今は斯う言ふ馬鹿

気た真似をする者も無からう」(服部霞峰『木葉書』『ハガキ文学』一一三 日本葉書会 一九〇四)

- (14) 巖谷小波 『画はがき私観』(『ハガキ文学』一一一 日本葉書会 一九〇四)  
 (15) 「江戸橋本局へは夜半より買手殺到し、郵便局は之に備へて局前を締切り通用門に丸太の柵を設け、門には木戸を造りて局員立番し、日本橋署よりは署長は多数の非番巡查を率ゐて警戒し、群衆は次第に列をなして西河岸より左へ呉服橋、鍛冶橋迄続き、其の長さ十五、六町に及び、其の数三、四万、伊澤警視庁部長と日本橋署長とは巡查を督して道路の警戒に当る。又神田局に於いては群衆は其の順番の廻り来ることの待遠さに窓を叩く者、石を投ぐる者を生じ、同局西隣万世橋消防署の窓下に押し付けられし者は身動きも出来ず、遂に水を乞ひ救を求め、果ては人事不省となり医師の手当を受くる者、重患者にして付近の病院に入院せし者を生じ、本所局に於いては局を包圍し雑踏喧騒甚しきに至りたるため被服廠より衛兵十名を出し、山なす人の頭よりポンプにて水を注ぎかけ、尚鎮静せざるより、午前六時「売下を停止す」との揭示を出し、大混乱の内に板挟みとなりて苦しみをるものを場所柄とて数名の力士馳付け、之を救ひ出した等、此の絵葉書の発行は未曾有の戦捷気分と合して、想像も及ばない情景を現出せしめてゐる」(『通信事業史』第二卷)
- (16) 佐藤健二 『絵葉書覚書』、田邊幹 『メディアとしての絵葉書』、生田誠 『日本絵葉書カタログ』 など  
 (17) 前出『ハガキ文学』 一一一  
 (18) 前出 佐藤健二 『絵葉書覚書』  
 (19) 「人種研究材料としての側面輪郭図」(『東京人類学会雑誌』 第二五〇号所収 一九〇七) でも述べている。また続く記述で、資料としての絵葉書を保存するための「はがき帖」の作成を提案している。(『本式のアルバムの挿むのも煩はしいが、さりとて何所かへ混れ込ませるのも惜しいと云ふ様な「はがき」が往々有る。私は斯う云ふものを集めて保存する為に、極簡単な方法を用ゐて居ます。先づ一緒にすべき「はがき」を幾枚でも一列に並べ、隣り合つて居るものを幅の狭い紙で巻き合はせ全体を屏風の様にして畳む。これで前後に適当な表紙を付けると手軽な絵葉書帖が出来ます。』(『ハガキ文学』 一一二)  
 (20) 『雑報』(『人類学雑誌』 三十一―四 一九一五)  
 (21) 『雑報』(『人類学雑誌』 三十九―二 一九二四)  
 (22) 平田健 『日本考古学絵葉書百景 明治時代篇』(『考古学集刊』 明治大学文学部考古学研究室 二〇〇八)  
 (23) 高橋健自 『歴世服飾図説』 思文閣 一九七五  
 (24) 『雑報』(『人類学雑誌』 二十九―五 一九一四)  
 (25) 國學院大學図書館編・発行 『楽石文庫目録』 一九八八

(26)

目録として今日公開されているのは以下の通りである。目録関係では平成十六年に『大場磐雄博士資料目録1』、平成十七年に『大場磐雄博士写真資料目録1』、平成十八年に『大場磐雄博士写真資料目録2』、そして平成二十二年に『大場磐雄博士資料目録2』が刊行されている。また研究報告をいくつかあげれば、大塚初重「大場磐雄博士と登呂遺跡」、山内利秋「大場磐雄のグラフィズム——近代日本考古学と画像資料——」、関根信夫「大場磐雄と平出遺跡——写真資料を中心として——」、荒井裕介「学術フロンティア作業報告——大場磐雄資料編」、光江章・酒巻忠史「楽石雑筆にみる君津地方の遺跡調査」、中野宥「登呂遺跡に見る記録写真と大場磐雄」、加藤里美「登呂遺跡関連大場磐雄資料——ガラス乾板と大場資料——」、山内利秋・加藤里美・相山林継・小林達雄「考古学に関する記録写真資料の保存と研究への活用について——大場磐雄資料を中心に——」(日本考古学協会総会発表要旨)、加藤里美「大場磐雄資料の概要と特質」、山添奈苗「田市洗田遺跡

と三倉山の画像資料——大場磐雄、昭和13年1月——」、中村耕作「資料デジタル化事業の方法と成果」、山内利秋・加藤里美「大場磐雄博士資料の研究」、荒井裕介・中村耕作「大場磐雄博士写真資料の概要」、深澤太郎・山添奈苗「大場磐雄博士資料の目録作成」などがある。

(27) 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター編・発行『大場磐雄博士資料目録II』二〇一〇

(28) 『中央史壇』十三—十五 国史講習会 一九二七

(29) 『静岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第三集所収

(30) 『人類学雑誌』三十九—二 一九二四

(31) 大場磐雄『大場磐雄著作集 第六卷 楽石雑筆(上)』雄山閣出版 一九八二

(32) 『大場磐雄著作集 第二卷 先史文化論考(下)』雄山閣 一九七五